

---

# おとそ

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

おとそ

### 【Nコード】

N6028B

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

悪運の塊大門繁太郎。彼は戦争をしぶとく生き延び正月を楽しんでいた。しかしおとそがないのに激怒した彼はかみさんに無理矢理酒を持って来させるが。お笑いです。阿呆な男の話です。

## 第一章

おとそ

大門繁太郎はとかく悪運の強い男であつた。

戦争に行つても空襲に遭つても怪我一つしない。周りで何があつても怪我一つしない、そんな男であつた。

「俺は生まれつき運が強いんだ」

それが彼の口癖であつた。そのせいか戦争でも傷一つ負うことなく生き延びた。そのあまりもの悪運の強さに皆彼を不死身とまで言う程であつた。

「あんた運がいいなあ」

「おうよ」

彼は笑つてそれに応えるのがいつもであつた。

「そう思つか、やっぱりな」

「どうしてそんなに悪運が強いんだ？」

皆それがまず不思議であつた。

「何があつても生き残るし怪我一つせん」

「博打をやればいつも大当たり」

彼の仕事は兵隊になるまでは賭博師であつた。それが仕事なのかどうかかわらないがそれで妻子を充分養っているのもまた事実であつた。丁半も何でも負けたことがない。

「そりや御前あれだよ」

彼はそれを言われるといつも笑顔でこう述べるのであつた。

「前世の徳よ」

「前世のかい」

「そうさ、だから俺はこんなに運がいいんだ」

その大きな口をさらに大きく開けてそう言うのだ。

「何があつても生き残るぜ」

「へえ」

「それで戦争も乗り切ったんだな」

「ああ。けれどな」

だが彼はここで難しいというか困ったような顔をした。

「どうした？」

「折角生き残ったつてのに寒い世の中だな」

「それか」

「ああ。何ていうかよ」

ここで遠い目をした。

「何もかもがなくなっちまったな」

家の中もがらんとしたものである。本当に何も無い。

「俺の家は無事だったつてのに」

「家があるだけまだろ？」

「そうだよ。あれだけ空襲でやられたんだからな」

皆口々にそう述べた。

「家があるだけでも」

「そうかね」

だが繁太郎はそれでも不満があつたのだ。

「一番辛いのはあれだよ、酒がない」

「酒か」

「そうさ。俺はあれがないと駄目なんだよ」

賭博師らしく枯れは無類の酒好きであつた。いつも酒を欠かしたことはない。女房からは酔いどれ扱いされている程である。それでも止めるつもりは毛頭ない。

「戦争に負けて色々嫌なことはあるけれどな」

「酒がないのが一番嫌か」

「それだよ」

繁太郎は言う。

「何もねえ。酒もねえ」

「本当にな。これからどうなるのかな」

「正月も寒いだろうな」

繁太郎は顔を顰めさせてこう述べた。

「何もなくてよ」

「大分人もいなくなつたしな」

「そうだな」

彼等はそれぞれそう述べた。

「戦争でかなり死んじまつた」

「寂しくなつたよ」

「だからこそ飲みたいんだよ、俺は」

繁太郎はまた言った。

「いなくなつちまつたからよ。けれどそれもねえ」

「何もねえ」

「ないないづくしだ。何で酒までねえんだよ」

「あることにはあるぜ」

「カストリか？」

「そう、それだよ」

仲間内の一人が言った。

「どうしても飲みたいっていうんならそれ飲んだらどうだ？」

「そうだな」

繁太郎はその言葉に頷いた。

「じゃあやってみるか、どうしようもねえと」

「やるのか？」

「ああ」

彼は着物の中で腕を組んで答えた。見ればその着流しがよく似合う。胡坐をかきそこから見える赤い褌は賭博師としての粋の表れであらうか。

「ないんだつたらな」

「止めた方がいいんじゃないのか？」

別の仲間がそれを止めた。

「あれ色々入っていてやばいそうだぜ」

「酒がないよりましだ」

だが繁太郎はそう返した。

「何もないよりはな。違わねえか？」

「そこまで言うんならよ」

もう誰も止めなかった。

「まあ飲みな。運がよかつたら助かるだろうさ」

「おう、俺は運だけはいいからな」

またそれを自慢してきた。豪放なのか単に頭が悪いのかはわからないが。

「飲んでみるとするか」

「飲むのかよ」

「正月に何もないとな」

彼は言った。

「飲むしかないだろ」

「まあ程々にな」

「死なない程度に」

「ははは、病院で会おうぜ」

最後に豪快に笑った。戦争が終ったばかりの秋の話であった。

秋はあつという間に過ぎ去った。そして冬になった。時期は正月。その正月だった。

「おい」

彼は大晦日にまず女房に声をかけた。

「あれ、あるか」

「お酒かい？」

女房のシズは彼に顔を向けて尋ねた。

「それだよ。あるかい？」

「あるわけないだろ」

シズの返事は有無を言わせぬものであった。

「何もないのに何でお酒だけがあるんだよ」

「おせきも餅もねえのかよ」

「何もないね」

彼女は言った。

「すいとか闇市で貰ってきた乾パンとかならあるよ」

「それが正月の食い物かよ」

「仕方ないでしょ」

シズは文句を垂れる亭主に対してそう言い返した。

## 第二章

「食べられるだけ有り難いと思いなさいよ」

「あるだけまじってことか」

「そうだよ」

この夫にしてこの妻ありであつた。負けてはいない。

「食べられるだけ有り難いんだよ、この御時世」

「俺が博打で儲けた金でもこれだけか」

「悪銭身に着かずっていうしね」

妻の言葉は実に身に滲みる。

「仕方ないさね。まあおまんまが食べられるだけでもいいってことよ」

「じゃあそれはいいさ」

繁太郎は渋々ながらそれには頷いた。

「けれどな」

「何だい？」

「おとそがないっていうのはどういうことなんだ」

彼は抗議した。

「正月だぞ、それでおとそがないのか」

「おせちもないよ」

「それはもう我慢する」

腹立たしいがそうするしかなかった。

「けれど正月だぞ。それでおとそがないのは」

「ないから仕方ないだろ」

シズは言い返す。

「そこいらにあるの飲んでいなよ。水でもさ」

「水が酒になるか」

彼はそれに反論する。

「馬鹿言ってるんじゃないやねえ」

「じゃあどうしろってんだよ」

シズは段々喧嘩腰になってきた。

「そんなの何処にもないってのに」

「あるじゃねえか」

だが繁太郎の言葉は意外な方向に転がった。

「あるって？」

「そうさ、あるところにはあるじゃねえか。酒もよ」

「闇市にかい？」

「それだよ」

彼は言う。

「あるじゃねえか、たつぷりとよ」

「あれは止めときな」

だがシズはそれをすぐに取り下げるように言った。

「ああしたとこに出回ってる酒なんて口くなもんじゃないよ。下手したら死ぬよ」

「生きるも死ぬも運次第だ」

繁太郎は暴論を吐いた。

「酒が怖くて博打が打てるか」

「あんたが死んだらあたし達が困るんだよ」

博打打ちでも大黒柱だ。それに死なれては路頭に迷うというのだ。

「だから馬鹿なことはいしないことだね」

「ええい、五月蠅い」

だが繁太郎は聞き入れようとしなない。

「おめえが行かねえってんなら俺が行く」

そう言って家を出ようとする。

「ちょっと行って来るぜ」

「どうなっても知らないよ」

シズはむっとした声をかける。

「死んでも目が見えなくなっても」

スカトリにはメタノールも混ざっていた。それで死んだり失明し

たりした者が多かったのだ。とんでもない酒であつた。三合飲んだら死ぬとまで言われていた。このことから三冊出ただけで潰れる雑誌のことをスカトリ雑誌と読んでいた。

「だから大丈夫だ」

繁太郎は強情に言う。

「俺は運がいいんだからな」

「それでもたまに大して勝ってないじゃないか」

「ええい、五月蠅え」

いい加減頭にきた。実は彼はそれ程気は長くない。むしろ短気だ。

「金はあるんだ、行つて来るぜ」

「死んでも知らないよ」

「死んだら棺桶に花札でも入れとけ。じゃあな」

「全く」

暫くして一升瓶を抱えて戻つてきた。そしてそれを手にどっかりと家の中に座り込んだ。

「戻つたぜ」

「酒はそれだね」

「ああ、杯持つてきてくれ」

「あいよ」

シズは言われるまま杯を持って来た。そしてそれを手渡す。

「大丈夫なんだろうね、その酒」

「多分な」

「多分つて」

「飲んでみねえとわかりやしねえよ」

そう言つてその杯に酒を入れはじめた。トクトクと音がする。

「そうだろ？どんなに美味しい酒でもな」

「そりゃそうだけれどね」

「まあこれで一年のはじまりだ」

彼は言つた。

「おとそだ、おとそ」

「やれやれ」

「飲むぜ、今日は」

そう言って早速飲みはじめた。彼は瞬く間に一升空けてしまった。  
「ふう」

「凄いね、一升あつという間じゃないか」

シズはそんな彼を見て言った。彼女は飲んでいない。何か危なそうだったからだ。

「久し振りだぜ、こんなに飲んだのは」

「そうかい」

「なあ」

「何だい？」

「ちよつと……気分が悪いや」

「えっ!？」

それを聞いて顔を顰めさせた。

「それってまさか」

「そのまさかかもな。何かよ、頭が」

「ちよつと御前さん」

シズの顔が見る見るうちに蒼ざめていく。

「冗談じゃないよ、やっと戦争が終わったつてのに」

「医者呼んでくれ」

彼は言う。

「何かよ、目まで」

「ちよつと、ちよつと」

彼女は慌てて子供達を呼ぶ。

「早く医者呼んできな。このままじゃおとつあんが」

「早く頼むぜ」

彼は言う。

「何かよ。少しずつ」

「しっかりしなよ、何言ってるんだい」

夫の側に来て必死に声をかける。

「あんたに死なれたら困るんだよ、お願いだから死なないでくれよ」

「へへへ、やっぱり運の尽きかもな」

最後に自嘲めかして笑った。

「おとそで終わりつてな」

そう言つてその場に崩れ落ちた。そこに医者がやっとやって来てまた大騒ぎとなつたのであつた。

### 第三章

「よくもまあ」

頭の禿げた医者が病室で呆れた顔をしていた。

「メチレンを一升かい」

「ああ、あれやっぱりそうだったのかよ」

繁太郎は病院のベッドの上に寝ていた。それで医者に応えていた。

「そうだろうな、って思ったけれどよ」

「普通あれだけ飲めば死んでるぞ」

「やっぱりそうか」

「そうでなくても目が見えなくなっていた」

「按摩になるしかなくなっていたのかよ」

「まあそうだな」

「運がよかつたっておとだな、また」

「何言ってるんだよ、御前さん」

そこにいたシズが口を尖らせてきた。 4

「もうすぐで死ぬところだったんだよ」

「また運で助かったからいいじゃねえかよ」

「そういう問題じゃないよ、これからはこんな馬鹿なことは止めておきなよ」

「酒を止めろっていうのか？」

「それは言わないよ。もう言っても無駄だから」

繁太郎の酒好きは言って聞くものではない。残念なことに。それはシズが最もよくわかってしていることであつた。

「けれどさ、メチレンは止めておきな」

「ああ、それはな」

渋い顔ながら頷いてきた。

「普通死んでるんだよな」

「さっき言つた通りだよ」

医者は答えた。

「今生きているのが不思議な位だ」

「そうか。じゃあ止めるぜ」

彼はそれを聞いたうえで言った。

「流石に懲りたぜ」

「そうか。ならいいが」

「それでよ、シズ」

そして妻に顔を向けてきた。

「退院までどの位だ？」

「一週間つてところらしいよ」

「そうか、じゃあ一眠りすればすぐだな」

「どうしてそうなるんだよ」

「起きても一週間、寝ても一週間だろ。じゃあ寝て過ぐすぜ」

「本当にものぐさなんだから、御前さんは」

だが余計なところで働き者なのだ。だからこうしてメチレンで倒れて危うく死ぬところだったのである。

「いいだろ、それでも」

「まあ何もすることはないからね」

「将棋でもすつか、それが囲碁でも」

「そっちもいけるのか」

「ああ、金がかかってたらな」

医者に応えてニヤリと笑ってきた。

「負けたことはねえぜ。どうだい？」

「私は将棋で金はかけないがね。面白そうだな」

「よし、じゃあ早速やるかい」

「いや、まだ患者がいるからな」

「ちえっ、面白くねえ」

「やっぱりあんた大人しくしときなよ」

シズがそう言って嗜めてきた。

「誰かに迷惑かけるからさ」

「何か俺が子供みてえだな」

「頭の中身はそうじゃないか」

「へっ、博打は誰にも負けねえぜ」

「それはわかったから。じっとしておきな」

「わかったよ。じゃあ退院の用意しとけ」

「退院の？」

「そうだ。酒だ、今度はとびきりの酒用意しとけ」

「呆れたねえ。また酒かい」

「メチレンで倒れたのにだ。彼のこれは筋金入りであった。」

「おう、景気付けた」

「それで厄払いかい？」

「それもあるな。とにかく酒だ」

「それはいいが気をつけるんだな」

「医者はそのな彼を止めることはなかった。」

「一度倒れたからわかつているとは思うが」

「ああ、こいつやガキ共の為にもな」

「彼は言った。」

「もうそれはしねえよ。安心しときな」

「そうか」

「ああ、やっぱりそれはわかったさ。それでな、シズ」

「何だい？」

「これからはメチレンはやらねえ。無茶もしねえからな」

「そうあつて欲しいねえ」

「しかしまあ何だな」

「彼はそのうえで俯いて述べた。」

「今回も運に助けられたさ」

「全くだ」

最後に医者言葉が部屋の中に響いた。繁太郎の運のよさを示す話であった。戦後最高の博打打ちと言われた彼の逸話の一つであった。迂闊な逸話であったが。

おとそ

完

2  
0  
0  
6  
・  
1  
1  
・  
6

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6028b/>

---

おとそ

2010年10月8日15時33分発行